令和６年度

人権作文集　第54集

差別をなくする輪をひろげよう市民運動

入 賞 作 品 集

三木市・三木市教育委員会

表紙の作品

「年」

三木特別支援学校

小学部5年

石田あおばさんの作品

はじめに

昨年七月、三木市は市制施行七十周年という記念すべき節目を迎えました。七十年前と比べると、私たちを取り巻く環境は大きく変化するとともに、社会も進展しています。しかしながら、世界各地で起こっている戦争や紛争は止むことなく、国内でのパワハラやいじめ、インターネット上の心ない書き込みや誹謗中傷など、他人を排除し、かけがえのない人権を踏みにじるような事象を見聞きするたび、心が痛みます。

私たちは、差別につながるかもしれない無意識の思い込みや偏見に気づいたり、性別や国籍、年齢などの垣根を越えた温かい人と人との触れ合いや交流を通じ、一人一人が人権意識を高め、差別を無くする輪をひろげる行動を起こすことが大切だと考えます。

この人権作文集は、人権の大切さをテーマに寄せられた数多くの作品の中から優れた作品を掲載しています。これらの力強いメッセージが皆さんの心に届き、一人一人が主人公となって「人権尊重のまち三木市」を一歩前へと進めるアクションを起こすきっかけになれば幸いです。

結びに、多くの作品をお寄せいただきました皆様をはじめ、審査員の皆様に心からお礼を申し上げます。

令和七年二月

三木市長　仲田　一彦

★令和六年度「差別をなくする輪をひろげよう」市民運動入賞作品★

【ポスターの部】

《優秀賞作品》……8
自由が丘小学校　一年　松井　優佳里・広野小学校　四年　鳴瀧　悠人
三木中学校　三年　友野　優花

《優良賞作品》……9
三樹小学校　二年　森本　蒼士・緑が丘東小学校　六年　川下　詩月
自由が丘中学校　一年　野村　朱里

《佳作作品》……10
三樹小学校　一年　小苗　空詩・緑が丘東小学校　三年　藤本　真央
平田小学校　六年　鈴木　翔太・緑が丘小学校　六年　内牧　和奏
三木中学校　三年　黒田　瑠奈・別所中学校　三年　福岡　桃子

《奨励賞作品》……11
三木小学校　一年　桒村　知希・吉川小学校　一年　神田　ここ
自由が丘小学校　二年　濵本　稀々香・広野小学校　三年　磯貝　凛子
別所小学校　四年　河原　夢咲・自由が丘小学校　四年　大西　陽向

《奨励賞作品》……12
緑が丘東小学校　五年　西田　圭凛・自由が丘小学校　五年　鈴木　葵
緑が丘中学校　一年　佐藤　美莉・三木中学校　二年　小西　芙季
別所中学校　二年　田中　美彩花・自由が丘中学校　三年　常深　花歩

★造形作品★
三木特別支援学校「ころころローラー 模様づくり」(中学部)作品……13

【標語の部】

小学校の部……14
《優秀賞》
口吉川小学校　三年　寺前　圭真・別所小学校　六年　福岡　哲平
《優良賞》
三樹小学校　三年　松村　奏汰・口吉川小学校　六年　荷　花
《佳作》
緑が丘小学校　一年　岸上　和楽・緑が丘小学校　二年　吉竹　紘那

《佳　作》……15
緑が丘東小学校　四年　松元　杏莉・広野小学校　四年　中西　陽菜歩

中学校の部

《優秀賞》三木東中学校　二年　魚住　恋花
《優良賞》自由が丘中学校　二年　山田　優那
《佳　作》三木東中学校　二年　井上　綾乃・三木東中学校　三年　和木　健太郎

ＰＴＡ・一般の部

……16
《優秀賞》平田小学校　ＰＴＡ　荒田　直樹
《優良賞》別所小学校　ＰＴＡ　森　照彦
《佳　作》志染小学校　ＰＴＡ　稲上　友理
吉川小学校　ＰＴＡ　松原　英里

【作文の部】小学校の部

《優秀賞》
人とちがうことはおもしろい　自由が丘小学校　四年　鎌田　健次……17
ぼくの兄ちゃん　緑が丘小学校　五年　井上　煌琥……19

《優良賞》
かがやく こせい　広野小学校 三年 西村 咲良……22
きつ音と私　吉川小学校 五年 寺田 紬……25
《佳　作》
いのちの大切さ　緑が丘小学校 三年 為川 瑛太……27
九十一歳のひいおばあちゃん　自由が丘東小学校 四年 原田 果歩……29
おじいちゃんと車いす　志染小学校 六年 藪西 圭悟……32
ぼくの大切な二つの国　自由が丘小学校 六年 岩崎ザーニ健太朗……35
《奨励賞》
大切ないのち　志染小学校 三年 岡本 聡達……38
友だち　自由が丘小学校 五年 小紫 心瑛……40

中学校の部

《優秀賞》
外国人だから・・・　三木中学校 三年 アチャリヤ ウパマ……43
《優良賞》
違い　緑が丘中学校 二年 芝田 稜……46

《佳　作》
人種差別のない世界へ　三木東中学校　一年　福井　暁大……49
学べることの幸せ　緑が丘中学校　三年　天羽　恵莉菜……52
《奨励賞》・全国中学生人権作文コンテスト明石・三木地区予選《奨励賞》
言葉と人種差別　三木中学校　一年　福本　真人……56

PTA・一般の部

《優秀賞》
子どもと親の向き合い方　別所中学校　PTA　宮崎　綾美……59
《優良賞》
子どもの人権　自由が丘東小学校　PTA　渡邊　令奈……63
《佳　作》
言葉に対する責任について　吉川小学校　PTA　森本　まりこ……67
つながる支援の輪　自由が丘中学校　PTA　中田　瞳……70
《奨励賞》
理解と共感のある優しい世界へ　別所小学校　PTA　木下　紗也加……74

☆令和六年度全国中学生作文コンテスト入賞作品☆

（明石・三木地区予選　優秀賞）

優しい社会へ　三木中学校　二年　久米　杏里紗……78
思いやりの輪　三木東中学校　二年　西岡　美湖……81

（明石・三木地区予選　奨励賞）

自分とはちがうから　自由が丘中学校　一年　新﨑　奏心……85
盲導犬の大切さ　吉川中学校　一年　國嶋　心琴……88
ヘルプマーク　三木中学校　二年　マダラリッサ……91
言葉の責任　別所中学校　二年　大西　千弥……94
優しさあふれる世界に　吉川中学校　二年　木村　那美……97
あたりまえのありがたさ　三木東中学校　三年　伊藤　萌理……100
平和のために　自由が丘中学校　三年　山下　梨杏……103
インターネットと人権問題　吉川中学校　三年　競　尊……106

「差別をなくする輪をひろげよう」

市民運動入賞作品

【ポスターの部】

ポスターの部

《優秀賞作品》

自由が丘小学校　１年　松井　優佳里

三木中学校　３年　友野　優花

広野小学校　４年　鳴瀧　悠人

《優良賞作品》

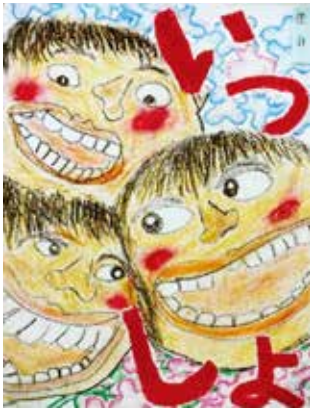
三樹小学校　２年　森本　蒼士

自由が丘中学校　１年　野村　朱里

緑が丘東小学校　６年　川下　詩月

《佳作作品》

緑が丘小学校　６年　内牧　和奏

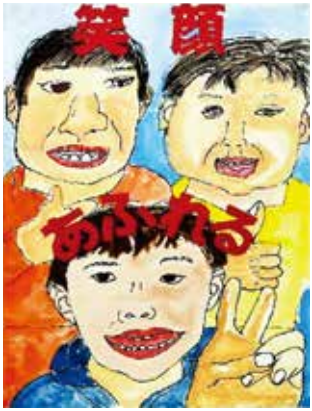


三樹小学校　１年　小苗　空詩

三木中学校　３年　黒田　瑠奈

緑が丘東小学校　３年　藤本　真央

別所中学校　３年　福岡　桃子



平田小学校　６年　鈴木　翔太

《奨励賞作品》

広野小学校　３年　磯貝　凛子

三木小学校　１年　桒村　知希

別所小学校　４年　河原　夢咲

吉川小学校　１年　神田　ここ

自由が丘小学校　４年　大西　陽向

自由が丘小学校　２年　濵本　稀々香

《奨励賞作品》

三木中学校　２年　小西　芙季

緑が丘東小学校　５年　西田　圭凛

別所中学校　２年　田中　美彩花

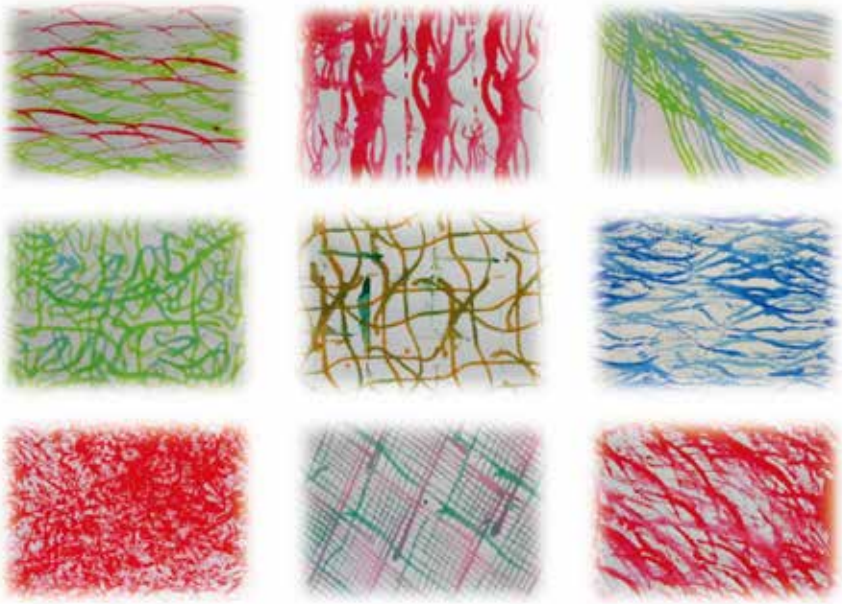
自由が丘小学校　５年　鈴木　葵

自由が丘中学校　３年　常深　花歩

緑が丘中学校　１年　佐藤　美莉

『ころころローラー 模様づくり』

三木特別支援学校（中学部）の作品



ローラーに毛糸を巻きつけ、毛糸に好きな色をつけます。画用紙の上でローラーを自由に転がし模様づくりをしました。個性豊かな作品ができました。

「差別をなくする輪をひろげよう」

市民運動入賞作品

【標語の部】

標語の部

【小学校の部】

《優秀賞》

かっこわるい　イジメをする人　見てる人
口吉川小学校　三年　寺前　圭真

しあわせに　なるためみんな　生きている
別所小学校　六年　福岡　哲平

《優良賞》

目を見てあいさつ　心であくしゅ
三樹小学校　三年　松村　奏汰

おはようの　その一言で　救われる
口吉川小学校　六年　荷　花

《佳作》

ありがとう　えがおあつまる　あいことば
緑が丘小学校　一年　岸上　和楽

言われても　言ってもうれしい　ありがとう
緑が丘小学校　二年　吉竹　紘那

人をけなしてわらいをとる!!
それ本当に、おもしろい？
緑が丘東小学校　四年　松元　杏莉

分かってる？ スマホの向こうの その気持ち
広野小学校　四年　中西　陽菜歩

【中学校の部】

《優秀賞》　思うだけより 行動してこそ「思いやり」
三木東中学校　二年　魚住　恋花

《優良賞》　見た目では 判断できない 良さがある
自由が丘中学校　二年　山田　優那

《佳作》　SNS 履歴に残る 心に残る
三木東中学校　二年　井上　綾乃

許さない 差別を無くす 地域の輪
三木東中学校　三年　和木 健太郎

【ＰＴＡ・一般の部】

《優秀賞》　他人事　それはいつか　自分事

平田小学校　ＰＴＡ　荒田　直樹

《優良賞》　考えよう　あなたの「普通」と相手の「苦痛」

別所小学校　ＰＴＡ　森　照彦

《佳作》　認め合う多様性　わたしと違う　あなたの普通

志染小学校　ＰＴＡ　稲上　友理

あいさつで　生まれる笑顔　消える壁

吉川小学校　ＰＴＡ　松原　英里

「差別をなくする輪をひろげよう」

市民運動入賞作品

【作文の部】

【小学校の部】

《優秀賞》

人とちがうことはおもしろい

自由が丘小学校　四年　鎌田　健次

ぼくのお母さんはラオス人です。お母さんはおこったらこわいけどやさしくっておもしろいし、歌はそんなにうまくないけどいつも練習しているし、先生と日本語で話せます。プリントも読めて日本語をよく勉強しています。でもぼくのお母さんは国語や漢字を教えられませんし、ローソンをローションと言います。

お母さんには、ラオスの友だちやいとこがいます。お母さんは生魚がすきでよくくらずしに行きます。いつも辛い食べ物を、食べています。ぼくはソムタンとかは辛くて食べたらしたがずっといたくて食べられません。

ぼくのお母さんは車の運転ができません。お母さんは運転ができないので、野球やスイミングの時はおじさんやお父さんに運転してもらっています。他の友だちのお母さんは

みんな車を運転ができるのでうらやましいです。

他の友だちは宿題で分からないところを教えてもらいますが、ぼくのお母さんは分からないといって教えてくれません。お父さんは土曜と日曜にしか家にいないので、お母さんに教えてもらえる友だちがうらやましいです。

でも、ぼくのお母さんはやさしいし、いつもラオスの歌を歌ってくれて、うまくないけどおもしろいです。

それ以外にもラオスの親せきもおもしろいです。朝からお酒をのんでいる人とか、いつもおどっている人とかがおもしろいです。

ぼくのお母さんは友だちのお母さんとちがうところが多いけど、とてもおもしろくって楽しくって大すきです。

人とちがうことはおもしろくって楽しいことだと思います。

《優秀賞》

ぼくの兄ちゃん

緑が丘小学校　五年　井上　煌琥

ぼくのお兄ちゃんは、高校一年生で、ぼくの五さい年上です。昔はよく一緒に遊んでいたけど、最近は話をする時間もあまりありません。この人権作文が宿題に出て、何を書こうか、なやんでいた時に、お母さんが、

「お兄ちゃんが三年生の時に書いた人権作文が残っているよ」

と見せてくれました。それは、「ぼくの弟」という題名の人権作文でした。

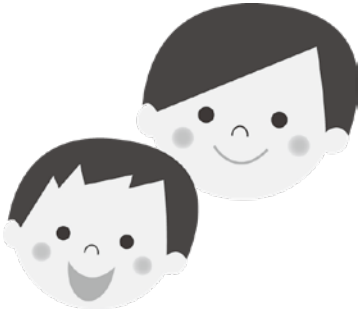
ぼくは、先天性の「がんけんかすい」という病気で、生まれた時から片目が少ししか開かなかったそうで、ぼくは今まで三回の手術をしました。そのうち一回目の手術の時に、お兄ちゃんが書いた人権作文が「ぼくの弟」だと教えてもらいました。ぼくは、小さくて覚えていないのですが、家族で公園や買い物に行くと、小さい子がぼくを指さして

「目、へんや！」

「あの子の顔、見て！」
と言われることもあって、そんな時、小さかったぼくは、少し悲しそうに下を向いていたから、お兄ちゃんは悲しくて、くやしい気持ちになっていたそうです。
　ぼくが手術して入院している間も、
「だいじょうぶかな。ちゃんとねむれているのかな」
と心配してくれていて、ぼくが元気に帰って来てくれて、とてもうれしかったと書いてあるのを見て、ぼくもとてもうれしくなりました。「ぼくの弟」の最後には、「また弟の目のことを言われた時は、弟にぼくの一番の笑顔で、『かわいいよ』と言ってあげようと思います」と書かれていました。それを見て、ぼくは、ぼくが思っていたよりもずっと、お兄ちゃんに大事に思われていたんだと気がつきました。
　今、三回目の手術も終わり、目も開いていますが、閉じづらくなっているので、ぼくが小学校に入学する時に、今までのことがあるから、また目のことを言われて、ぼくが悲しい気持ちになったりしないか、家族は心配していたそうです。しかし、入学してから五年生になった今まで、友だちや学校の子たちに目のことでいやなことを言われたことは、一度もありません。

学校では、チクチク言葉を言われていやな気持ちになることもあります。でも、本当に言ってはいけない相手が悲しむようなことは言わないやさしい友だちが、ぼくのまわりには多いんだなと、そのことも「ぼくの弟」を読んで思いました。

人権作文の宿題が出たときは「大変だな」と思っていたけれど、この宿題のおかげで、たくさんの人の気持ちを考えることができて良かったです。ぼくもお兄ちゃんが悲しい気持ちになった時、ぼくの一番の笑顔で、良いことを言ってあげたいと思いました。



《優良賞》

かがやく こせい

広野小学校 三年 西村 咲良

わたしのランドセルの色は、チェリーピンクです。お兄ちゃんは黒色、お姉ちゃんは、赤色のランドセルをえらんでいました。お友だちのランドセルは、みず色、ちゃ色、ピンク色などみんないろいろな色のランドセルをえらんでいます。

わたしのおとうさんとおかあさんが子どものころは、男の子が黒色、女の子は赤色ときめられていたと知りました。ランドセルは六年間使う大切なカバンです。黒色のランドセルがいいなと思う女の子がいたり、赤色のランドセルがいいなと思う男の子もいたと思います。今は、たくさんの色から自分の好きな色をえらべます。わたしは、自分でえらんだチェリーピンクが大好きです。自分で好きな色のランドセルをえらべて、とてもよかったなと思います。

学校に行く時に、いろいろなランドセルがうれしそうにならんでゆれているのを見ると、

毎日うれしくなります。
たくさんの色のランドセルとおなじ数だけ自分のランドセルをえらんだお友だちがいます。どの色もすてきだと思います。みんなこせいをピカピカにかがやかせる一番星です。
わたしはお空のたくさんの星のように、みんなのこせいはいつでもかがやいてほしいです。べんきょうがとくい、スポーツがとくい、絵をかくのがとくいなど、お友だちのとくいなところを見つけていきたいです。
わたしは左ききです。えんぴつをもつのは左、おはしをもつのも左、ボールは右です。わたしのおじいちゃんも左ききです。左ききだけど、小さいときに右が使えるようにかえさせられたといっていました。たいへんだったろうなと思います。
「右きき、左ききもこせいだから、なおさなくていい」
と、おとうさんとおかあさんにいってもらえたので、わたしはなおしていません。わたしのこせいは左ききです。左ききでこまったことは、きょうかしょが手にかくれて、見にくいことだけど、ちょっとくふうすると見ることができます。習字のときも
「左ききの人はこうするよ」

といってもらえたのであんしんしました。左ききでいるだけでこまることもあるので、体のふじゆうな人は、きっといろいろなことでこまるんだろうなと思いました。みんなでたすけあったりくふうしたりすることで、くらしやすくなるだろうなと思いました。

おとうさんたちのころとくらべて、わたしは、こせいを大切にしてもらえるじだいに生まれてくることができてよかったです。

人とちがうことははずかしいことじゃなくて、一人一人のだいじなことなんだなと思いました。

わたしのきょうしつの中は、二十二人のみんなの一番星でかがやいています。

《優良賞》

きつ音と私

吉川小学校　五年　寺田　紬

私には、きつ音があります。話し始めの一文字目がつまってしまい、何回も同じ文字を言ってしまうことがあります。大勢の人の前で話す時や、気持ちが高ぶった時、話したいことがたくさんある時に、きつ音が出ることが多いです。

年長から小学校三年生まで、ことばの保育室やことばの教室に通い、自分のきつ音の特ちょうや、どんな時に出やすいか、きつ音が出た時にどんな反応をされたらいやだと感じるか、どんな助けがあるとうれしいと感じるかなどを勉強してきました。

ことばの教室に通いながら、自分のきつ音について少しずつ理解してきたころのことです。休み時間に友だちと話していて、きつ音が出た時に、それをまねされたり笑われたりしたことがありました。家に帰って母にそのことを話すと、

「その友だちはきつ音のことを知らなくて、何度も同じ言葉をくり返す紬にびっくりし

たのかもしれないね。紬のきつ音のことをみんなに知ってもらって受け入れてもらえるといいね」
と言われました。
　そこで三年生の時に、クラスのみんなに向けて手紙を書き、それをみんなの前で発表しました。そこには、きつ音とはどんなものか、どんな時に出やすいか、きつ音が出た時は、まねされたり笑われたりすると悲しくなること、落ち着けば正しく話せるので少し待ってほしいこと、これも私の個性のひとつなので受け入れてほしいことなどを話しました。この発表をしている間にも、何回かきつ音が出ましたが、クラスのみんなは真剣に最後まで私の話を聞いてくれました。それからは、きつ音をばかにされることはなくなり、きつ音が出てもいやな気持ちになることはなくなりました。私の個性を受け入れてくれた友だちには感謝の気持ちでいっぱいです。
　私のきつ音だけではなく、他にも外見だけでは分からないようなことで、悩んでいたり、困っていたりする友だちがいるかもしれません。私のようにみんなに知ってもらうことで過ごしやすくなることもあると思うし、困っている人に気づいた時には、その人のことをよく知って、少しでも助けになるような行動をしたいと思います。

《佳 作》

いのちの大切さ

緑が丘小学校　三年　為川　瑛太

ぼくは、むかしカブト虫をかっていました。毎日えさをやってそだてていました。そのカブト虫は、半年の半分くらいで死んでしまいました。ちゃんとえさをやったのにどうして死んだんだろうなあと、そのころはとってもふしぎでした。

ひっこしてから水そうでメダカをかいました。メダカは、大切に水そうでえさをやってそだてました。そだてばそだつほどうれしくなりました。カブト虫と同じようにそだてました。それでもいつ死んじゃうか、死んじゃったらどうしようと思いました。長生きは、しました。冬になって寒くなりました。外は、寒くて夜にはえさがあげられません。そして朝にメダカを見ると、こおって死んでしまっていました。その時は、とってもかなしかったです。

それから、生き物のいのちがとってもみじかくて弱いものだとはじめて分かりました。

いのちは、どの生き物でも一つしかないし、とってもきちょうなものなんだなあと分かりました。

つぎは、人間のいのちについて考えてみました。ぼくには、さいきん妹ができました。生まれてきた時は、ぶじにうまれてよかったと思いました。ぼくが思っていたよりも小さくて、ねている時は、いきをしているかしんぱいになることもあります。でも、ね顔やわらった顔を見ると、自分もうれしくなります。赤ちゃんは、ほかの人のたすけをかりないと何もできなくてとても弱い人間です。でも、ないたりわらったりしてみんなをえ顔にさせてくれます。おかげで家の中が明るくみんながえ顔になる大切なそんざいです。そんな妹と仲よくせい長していきたいです。

ぼくは、生き物をそだてたことや妹が生まれたことからいのちの大切さについて学びました。人や生き物を大切にして、いのちにかんしゃできる人になりたいです。

《佳 作》

九十一歳のひいおばあちゃん

自由が丘東小学校　四年　原田　果歩

わたしには九十一歳になるひいおばあちゃんがいます。友だちに九十一歳というとみんなおどろきます。今九歳のわたしの十倍の年をとっていると思うと、あらためてわたしもすごく長生きだなと感じます。ひいおばあちゃんはにぎりずしが好きでおいしそうによく食べます。それにわたしの話をうんうんうなずきながら、楽しそうに聞いてくれるやさしいひいおばあちゃんです。

ひいおばあちゃんは、一人で神戸市に住んでいます。これだけ聞くと、すごく元気なおばあちゃんだと思うかもしれません。しかし、ひいおばあちゃんは、足が悪いので、つえと手を引いてくれる人がいないと、一人で外出することができません。大好きな買い物を一人で楽しむことも、気軽におさんぽに行くこともできません。だから、お買い物やおそうじの手伝いをしてくれるヘルパーさんに時々手伝ってもらっています。

「とっても助かるわ」
と、ひいおばあちゃんが話していましたが、その顔が少しさびしそうに感じました。わたしと同じように、行きたいときに外に行けないし、常にだれかといっしょにしか行動ができないなんて、不自由なんだろうと思います。そんな話をひいおばあちゃんに話すと、
「もしかしたら転んでしまうかもしれない」という不安が強くなり、外出することがへってしまったそうです。だから、わたしはひいおばあちゃんの助けになりたいと思って、手を引いてお買い物に行く手伝いをしています。ひいおばあちゃんの手は、わたしの手の大きさと同じぐらいで温かいです。わたしが手を引いてあげると、ひいおばあちゃんは、
「いつも手を引いてくれてありがとう」
とよろこんでくれます。そのときの顔を見ると、わたしの心はポッと温かくなります。ひいおばあちゃんのお手伝いをすることで、人の役に立つことはこんなにうれしいんだなと気づきました。
　ひいおばあちゃんは、もうすぐひざのしゅじゅつをするそうです。リハビリをすることで、今よりずっと動きやすくなって、外出できる回数がふえるかもしれません。しかし、リハビリは大変だと聞いたので、わたしもいっしょに歩く練習をしてあげたいと思います。そし

て、いろいろな場所につれていってあげたいです。

わたしは九歳。ひいおばあちゃんは、わたしより十倍の年をとっています。でもわたしの方が十倍元気です。だから、十倍の元気な力でひいおばあちゃんを助けてあげたいです。そして、いつまでも長生きしてほしいです。

《佳 作》

おじいちゃんと車いす

志染小学校 六年 藪西 圭悟

僕は最近テレビで車いすのおじいさんとそのおばあさんの話という番組を見ました。おばあさんはおじいさんの世話をしていて、おじいさんは車いすで自由に動けないなどで大変という話でした。

最近僕のおじいちゃんも、車いすで生活することになりました。そして車いすのおじいちゃんをお世話するのはおばあちゃん一人です。時々療法士の方がリハビリをしに来ているけど週に二、三回だけで、それ以外の日はとても大変そうです。

特に車からおじいちゃんを降ろすときは重いおじいちゃんを抱きかかえて降ろすという力仕事なのでおばあちゃん一人ではとてもしんどそうです。他にもテレビのおじいさんのように僕のおじいちゃんも自由に動けないので、トイレに行きたい時などはすぐに行けなくて困ります。

僕は、そんなおばあちゃんとおじいちゃんをただ見守ることしかしていませんでした。でもこのテレビを見て、僕は手伝っていなかったことを思い出しました。僕は、おじいちゃんやおばあちゃんが大変だったところを見てきました。それなのに手伝おうとしなかったことを思い出して、これからはおじいちゃんを車から降ろすときに支えたり、車いすでおじいちゃんを運んだりすることを手伝おうと思いました。

世の中には僕のおじいちゃんやおばあちゃんのようなことがたくさんあります。僕のおじいちゃんとおばあちゃんは手伝ってくれる人がいるからまだいいけど、手伝ってくれる人がいない家も中にはたくさんあります。僕はそのような家のために介護の環境を良くしたらいいと思いました。

例えば、老人ホームです。老人ホームは、入りたくないという人が多いそうです。そんな人のために老人ホームへの入居者や利用者の対応や入居費、利用費などを援助するのがいいと思いました。老人ホームでの一ヶ月の値段は約七万円から二十万円と、年金で生活している方などはかなりしんどそうなので、援助をするのがいいと思いました。

他にも、地域の人と助け合うことも大切です。最近は少子化が進んでだんだんとお年寄りの方が増えているので、地域の人で助け合う関係ができたらいいと思いました。

このように僕はみんなが助け合うと世の中は良くなると思います。今まで地震や災害の復興でも、みんなで支えあったからできたと思います。

僕は今までおじいちゃんやおばあちゃんを見守るだけだったけど手伝えることはありました。これからはおじいちゃんの車いすを押してあげたり、車から降りるときに支えたり、他にもたくさん手伝えることはあります。小さいことからでいいから手伝っていきたいです。

《佳 作》

ぼくの大切な二つの国

自由が丘小学校 六年 岩崎 ザーニ 健太朗

ぼくは、日本人の母とミャンマー人の父の間に生まれたいわゆるハーフです。日本語の名前の間にカタカナの名前があります。まわりの友だちからは、カタカナの名前でよばれることが多いです。弟には、ぼくとはちがうカタカナの名前がついていて、生まれた曜日でちがうそうです。初めて会う人からは、

「なんでカタカナの名前が入っているの」

と聞かれたり、

「ミャンマー語、しゃべってよ」

とよく言われたりします。そんな時には、ミャンマーに行った時のことを話して、日本とはちがうことをみんなに知ってもらうようにしています。

ぼくが最後にミャンマーに行ったのは一年生の時なので、少し前になります。その時に

ぼくは、日本とちがうミャンマーのことをたくさん知ることができました。

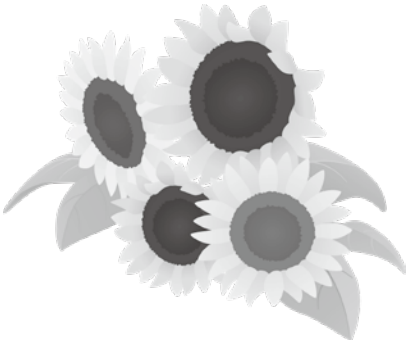
ミャンマーには、さまざまな人種の人が住んでいて、考え方や宗教、生活習慣などさまざまなちがいがあることに気がつきました。同じ会社で働いている人の中にも、宗教のちがいで食べる物や着る服がちがったり、仕事中にお祈りをする時間をとったりするなど、さまざまな生活スタイルがあるようです。いろいろな考え方の人がいるので、問題もたくさん起きますが、おたがいの意見を言い、理解してもらったり、ゆずれる所はゆずったりして、さまざまな人種の人が共に生活している様子がありました。まだ、おさなかったぼくには、不思議な所に見えましたが、相手を知ろうと行動したり、理解しようと努力したりする姿勢は、差別やへん見(思い込みや決めつけ)を取りのぞく第一歩だと思います。

ぼくの住んでいる日本でも外国人がたくさん住んでいて、外国人に対して差別やへん見があることを知っています。ぼくは、差別やへん見が世の中から無くなってほしいと思っています。たとえ、文化や考え方がちがっても、おたがいのことを知り、理解し合える世の中にしていきたいです。

日本人が外国に行けば、その国の人たちにとっては、日本人が外国人になります。だからこそ、日本でも、どこの国の人かや、はだの色、宗教など日本人とちがいがあったとして

も、差別やへん見はあってはならないと思います。みんながおたがいのことを知ろうとしたり、ちがいを受け入れたりすることで、外国人がもっと住みやすい社会になると思います。

ぼくは、どこの国の人とも同じように接する人になりたいです。みなさんも、近くにいる外国の人と目が合ったら、笑顔で少し話しかけてみてはどうでしょうか。一緒におたがいのさまざまなちがいを見つけ、理解し合える日本になることをぼくは期待しています。



《奨励賞》

大切ないのち

志染小学校　三年　岡本　聡達

ぼくは、いのちは一人に一つしかないものだから、大切にしないといけないと思います。でも、せかいではせんそうをしている国がたくさんあります。せんそうで何のつみもない人たちのいのちがぎせいになっていて、ぼくはとてもかなしく思っています。

ぼくは、ニュースで、ロシアとウクライナがせんそうしていて、ばくだんをおとしあって多くの人がなくなっているということを知りました。ニュースでは、ウクライナやロシアの人が、「せんそうがつづいていることがとてもつらい」といっていました。ぼくも「どうしてせんそうがおきてしまうのだろう。はやくやめたらいいのに」と心の中で思いましたが、きっとぼくにわからないじじょうがあるのかなと思いました。

一年前にぼくのおじいちゃんがなくなってしまいました。ぼくも家ぞくもとてもかなしみました。ぼくもおじいちゃんのことをときどき思い出してかなしくなりますが、ずっと

いっしょにいたおばあちゃんはもっとさみしいと思います。生きている人は、いつかはしんでしまうのは当たり前です。だから一つしかないいのちを大切にして一生けんめいに生きなければいけないと思います。

しかし、せんそうがおきてしまうと、「生きたい」と思っていてもその人の思いにかんけいなくいのちがうばわれてしまうことがあります。それはあってはならないことだとぼくは思います。

せんそうをつづけている国に「せんそうをやめましょう」とつたえることは、大事だと思います。ぼくは国のえらい人たちにそれをつたえたいです。でも今はできません。せんそうをつづけている国のえらい人たちに会うことができないからです。今、ぼくにできることは、家ぞくや友だちなど、みのまわりにいる人たちを大切にすることだと思います。やさしさと思いやりをもってせっすることが人のいのちや人けんを大切にすることにつながっていくと思います。せかいの人たちの思いやりの心がもうすこしだけふえたら、せんそうはなくなるのではないかと思います。せかいのみんなが平わになったらぼくはとてもうれしいです。

《奨励賞》

友だち

自由が丘小学校　五年　小紫　心瑛

ぼくは、生まれた時から、ちょうの病気をもっています。五千人に一人のちょうの病気です。ぼくは、病気のことでいじめられたり、ばかにされたり、つらい思いをしたりするんじゃないかと心配していました。そして、ぼくはつらくても負けないようにがんばろうと思っていました。でも、やっぱり心配でした。小学校に入学してから、ぼくはいつも病気のことで何か言われないか、からかわれないか、笑われないか気にしていました。でも、ぼくは今までつらいことや、いやな思いをしたことは一つもありませんでした。なぜかというと、ぼくの周りにはやさしい友だちがたくさんいるからです。ぼくが学校をお休みすると、「だいじょうぶ？早くなおって学校に来てほしい」

と言ってくれたり、

「明日は学校来れる？待ってるで」

と言ってくれたりするのが、とてもうれしいです。ぼくがおなかが痛くて、おなかをおさえてしゃがんでいると、
「どうしたん？痛いん？」
と心配してそばにいてくれます。学校だけじゃなく、ぼくが習っているサッカーの友だちもいつもぼくのことを心配して、
「ちょっと休んどく？」
とか、
「いっしょに休けいしとこう」
とやさしい声をかけてそばにいてくれます。友だちのやさしい言葉や、やさしいたい度で、ぼくは少し元気になります。ぼくが調子が悪く学校を休んだときに、家のポストに白いふうとうに入った手紙が入っていました。手紙の中には、友だちからのメッセージが入っていました。
「だいじょうぶか？早く元気になってサッカーしようぜ」
と書いてありました。ぼくは、その手紙がとてもうれしかったので、もし友だちがかぜで休んだときは、元気が出る手紙を書いてわたしたいです。ぼくがしてもらったり、言われ

てうれしかったりしたことは、ぼくも友だちにしてあげたいです。ぼくの周りには、やさしい友だちがたくさんいるからとてもうれしいです。病気でもやさしい友だちがいるから何でもがんばることができます。ぼくにとって友だちは宝物です。友だちにやさしくしてもらった分をぼくもやさしさでお返ししたいです。

【中学校の部】
《優秀賞》

外国人だから・・・

三木中学校　三年　アチャリヤ　ウパマ

私は、二〇二二年六月に日本に来ました。それまで、私は、日本語の勉強をしたことがなかったので、学校で先生や友だちと話すことは、とても難しくてできませんでした。外国と日本では、文化の違いがたくさんあります。その中で、私が一番びっくりしたのは、学校生活の違いです。

私は、日本に来る前は、祖父・祖母・弟と私の四人で暮らしていました。十二歳のときに、祖父・祖母・弟と離れました。自分の国の学校や友だちとのいろんな思い出が、今でも心の中に残っています。日本に来て十二年離れていた親と一緒に生活をすることは、うれしかったけれど、自分の国から離れたことは、とても悲しかったです。でも、日本で生活していくことに、わくわくと緊張のどちらも感じていました。

初めて日本の学校へ行くことになった時、私は、「日本で友だちができるかな」と緊張していました。学校に行った一日目、先生方に自己紹介した後、教室に入りました。私は、「前の学校と違うな。きちんとしているな」と思いました。二人の女子が、話しかけてくれて友だちになりました。少し安心しました。

部活動に入り、みんな優しくしてくれたので頑張ることができました。けれども分からない言葉ばかりで、うまくできなかった時は、私のことを言われているのかなと思っていました。もともと私は外向的な性格ですが、内向的になったことがありました。このままではいけないと思い、日本語を勉強したいと思いました。ある日、友だちが、

「ネパールのことを教えてくれない？」

と話しかけてくれたことをきっかけに、日本語が少しずつ分かるようになってきました。部活動でも友だちがテニスのルールを教えてくれたので、少しずつ自信がついてきました。それまで、私の後ろで笑い声が聞こえてきたら、私のことを笑っていると思っていました。今になってみると、私のことではなかったようです。そのことが分かるまで、一年かかりました。

私は、「外国人だから」という理由で差別をされたことはないけれど、言葉の壁を感じる時がありました。最初は何も分からなかったけれど、勉強をしたり、友だちが話しかけ

てくれたりして、話すことができるようになって分かるようになりました。私は、お互いのことを知るためには、まず話し合うことが大切だと考えます。「外国人だから」ということで分かり合えないと思うのは間違っています。

私はお互いが、外見などで人を判断するのではなく、その人の良いところを見つけて、認め合うことが大切だと考えるようになりました。誰とでも仲良くなることはできないかもしれないけれど、遠ざけるのではなく、お互いを認め合い歩み寄ることが大切だと考えています。言葉の壁にぶつかっても、あきらめないことが大切だと思います。新しい言語を習得することは簡単なことではないからです。私は、これまでのいろいろな経験を活かして、日本の生活で困っていたり、悩んでいたりする人たちをサポートしたいと考えています。

《奨励賞》

違い

緑が丘中学校　二年　芝田　稜

あなたは「障がい者アート」を知っていますか？障がい者アートとは、障がいのある方が作った芸術作品のことです。私は絵を描くことも絵を見ることも、とても好きなのですが、障がい者アートの存在のことは全く知りませんでした。今思うと、私が知ろうとしていなかったからなのだと思います。今回の人権作文のように、障がい者の方々のために自分ができること、などを考える機会は割とあると思うのですが、子どもの私にできることってあるのだろうか、そもそもよく分からない、というのが正直な気持ちでした。こういった気持ちが無意識にかかわりを避けてしまっていたように感じます。

そんなふうに思っていた私が、なぜ障がい者アートをテーマにこの作文を書こうと思ったのか、それは、偶然開いた一つの記事がきっかけになりました。その記事は障がい者アートについて書かれたもので、「心奪われる独創性。障がいのあるアーティストたちが生み出

す芸術の楽しみ方」というタイトルが大きく書いてありました。私はこの時、こういうものがあることは知らなかったのですが、私の好きな絵も関係するということで、興味を持ち見てみることにしました。くわしく見てみると、公募展などもたくさん開催されているそうで、中でも心に残ったのが「『みんな同じ』であることが求められがちな日本の教育では、差別や偏見を根本的になくすことは難しいのかもしれない。一方で、みんなと同じではない『特性』が大きな才能を生み出すこともある」という文です。私は今まで「みんな同じ人間だ」といった考えが大切だと思ってきました。でも「みんなと違う」ことだってすごく大切なことだと思うのです。当たり前のことかもしれませんが、ものの感じ方や、好きなもの、趣味、全ての、人と違うものがその人を作っているのだと思います。当たり前のことです。しかし、その違いが、時に差別や、いじめや何かのトラブルを巻き起こすこともあるわけです。そんな時、同じ所を探すのではなく、目をそらさないで、その人自身をどれだけ尊重できるか、大切にできるか、が重要だと思いました。

私は「違い」が特に必要になってくるものの一つが芸術だと思っています。なぜなら、個性、つまり、その人にしか表現できないものが求められるからです。障がい者アートについて調べている時に知ったアーティストで、山下重人さんという方がいます。山下さんの絵は、どこか独特な雰囲気があります。この方を知ったのも、初めて絵を見た時に、その世

界観を好きだと思ったことがきっかけでした。山下さんは、幼少より進行性筋ジストロフィー症という、遺伝的な背景をもとに、だんだんと筋肉が破壊されていく病気になりました。人工呼吸器を使用し、現在においては指先の僅かな動きを駆使しながらIT関連の在宅勤務と創作活動に取り組まれているそうです。私が、もし障がいを負ったり、絵を描くのが難しい体になったら、と考えると、それでも描こうと思えるかは分からないです。そんな中で、作品を作り続けることは、アーティストとしても、人間としても尊敬するなと思いました。

私は障がい者アートを知って、芸術という一つの繋がりで、いろいろな人と交流ができることを知りました。そこにあるのは、性別、年齢、障がい、全てをこえる、いいものはいいという価値基準です。「みんなと違う」というのは、誰にとっても当てはまることだと思います。しかし、その当たり前のことを忘れてしまう時があるのです。そんな時も違いを大切にすることを忘れないでいたいです。今の私にできることは、まずそれからです。

《佳 作》

人種差別のない世界へ

三木東中学校　一年　福井　暁大

みなさんは人種差別という言葉を知っていますか？人種差別とは同じ人間でありながらも言語や文化、はだの色などで人権を区別することです。僕は人種差別について反対です。なぜかというと何も罪を犯していないのに見た目やはだの色で差別、虐待される人が多くいるからです。

僕は幼稚園のころにインターナショナルスクールに通っていて、先生や生徒にいろいろな国籍の人がいたけれど、差別は全くありませんでした。その後日本人学校に通い始めても外国人の子や外国にルーツを持っている人がいたけれど、差別はありませんでした。自分は外国人という立場で街を歩いていても、現地の人たちは優しく接してくれました。知っている日本語のあいさつをしてくれたり、日本のことに興味を持ってくれたりしてくれてうれしかったです。また、サッカーのレッスンでもいろいろな国の人たちと一緒に関わってきました。これが僕にとっての普段の生活でした。

でも、友だちが日本の学校に体験入学したときに、日本の学校は言葉遣いがあらいと言っていました。だから、僕は日本の中学校に来る前まで、ハーフだからクラスのみんなに嫌がられるかもしれないと心配でした。しかし、日本の中学校に行ってみたら全然僕の国籍や人種について話す人はいなくてとても安心しました。

僕はよくテレビのニュース番組で人種差別についての問題を見かけます。最近見たニュースでは黒人を白人が虐待しているのを見ました。黒人は昔どれいとして使われていました。しかし、何年後かにどれいとして使われなくなり、普通の生活に戻れるようになりました。それでも人種差別を禁止する法律が成立したあとでさえ、さまざまな場面で黒人と白人を分ける人種の隔離が続きました。今でも偏見や差別が続いています。差別は日本国内でも存在しています。それは女性をはじめとしたジェンダー問題や子どもや高齢者に対する人権侵害、障がい者やハンセン病などの感染者に関する人権問題などです。人種差別はスポーツでも起こっています。僕の好きなスポーツのサッカーでも人種差別は起きていて、試合で相手チームのサポーターが選手のことを「さる」などのジェスチャーをして、選手のことをひどく例えて差別をしていました。自分の好きなサッカーでも差別がされているのがとても悲しかったです。人種差別を解決するには「子どものこ

ろからいろんな国の人とコミュニケーションをとること」、「自分が次の世代のために正しいことを伝えること」、「相手を理解し尊重すること」が大事だと思います。そのために自分も社会に生きる一員として言動に気を付けて相手のことを思って行動できるように努めたいです。

《佳 作》

学べることの幸せ

緑が丘中学校 三年 天羽 恵莉菜

「あなたが勉強を頑張る理由を作文しなさい」この塾の宿題に私は頭を悩ませていました。勉強を頑張る理由…テストで良い点をとり、志望校に合格し、将来の夢を叶えるため。そんな言わずとも分かるような、浅はかな理由しか思い浮かばず、ここ最近ずっと考えてしまいます。私はこの人権作文を通して、これから私が勉強を頑張る理由を見つけられたら、と思います。

私はまず始めに、インターネットで「勉強を頑張る理由」と調べてみました。すると、「論理的思考の能力を鍛えるため」や「問題を分析し、解決策を見いだすため」など、他にもたくさんの答えがでてきました。しかし、これを目標に勉強を頑張れるか、といわれると私には難しそうです。次に

「勉強を頑張る理由は何だと思う？」

と身近な人に聞いてみました。多くの人は私と同じで「良い高校」「将来」というワードを挙げていました。しかし、こんな言葉もありました。

「学べる、ということだけで幸せじゃないか」この言葉が私にはいろいろな意味で印象に残っています。私は、始めに述べた理由で勉強を頑張っていましたが、そのこと自体、そこまで前向きではなかった、だからこそ、この言葉がすごく響きました。そこで、この言葉の意味を考えてみようと思います。「学べる」ことが幸せなら裏返し、学べない人がいる現実について調べてみました。「全ての子どもに教育をうける権利がある」というこどもの権利条約のもと、日本での識字者数は、ほぼ百パーセントと言われており、ほぼ全ての子どもが勉強に励んでこられたことが分かります。ところが、世界の十五歳以上の非識字者の数は七億八千万人以上だと言われています。この数字は日本の総人口の約七倍です。それぐらいたくさんの人が権利があるのにもかかわらず、勉強をすることができなかったのです。七億八千万人の内、約三分の二は女の子であるそうです。そういった現実に声を挙げた一人の女性がいました。マララ・ユスフザイさんです。マララさんは、「イスラムの教えに反する」と言われ、女性が教育を受けることを認められない地域に生まれました。それに対してマララさんは十一歳のときに、女性への教育の必要性や平和を訴える活動を始めたそうです。しかし、その活動によって、彼女が十五歳の

とき銃で撃たれてしまいます。奇跡的に一命をとりとめることができましたが、ＴＴＰ（パキスタン、タリバーン運動）は再びこの少女の命を狙うと予告しました。私はこの話を知ったとき、なんて理不尽でなんて悲しい世界なんだろう、と思いました。皆さんも想像してみてください。自分たちと年齢の変わらない少女が、命をかけて世界に抗っているのです。女性が教育を受けるために。私にはそんな勇気、少しもありません。でも、そう他人事だと捉えて、世界の現状を見て見ぬふりをしていいのでしょうか。マララさんのスピーチにこんな言葉がありました「ペンは剣よりも強し。一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペンが世界を変えられる」確かに「そうだなあ」と思いました。そこで、私なりにこのスピーチ（言葉）を解釈してみました。「ペンは剣よりも強し」実際にペンでは剣などの武力には勝てません。しかし、ペンがあることで、字を、言葉を学ぶことができます。非識字者の方は、字や言葉が分からないが故に、自分たちが従うだけの残酷な現実を当たり前だと思ってしまいます。そんな不条理に抗えるのが字です。言葉です。ペンです。たった一本のペンが一人の子どもの未来を変えるんです。それって本当にすごいと思う分、私たちはものすごく幸せなんだね、と妹と話していました。すると、私たちも数年前、インドへ行く伯母にたくさんのペンを預けたことがあったそうです。まだ小さかった為、記憶が曖昧だったのでお話を聞いてみました。話による

と、私たちがあずけたペンは学校へ行けない子どもたちへプレゼントしたらしく、とても喜んでいたよ、と教えてもらいました。私は知らずの内に、誰かの力になれていたことを知り、すごく嬉しかったです。私にとってはたった一本でも、義務の教育であったとしても、世界中の誰かにとっては、かけがえのない一本で、学べることは幸せ。だから、私はこれから、自分の意思で少しずつでも世界の理不尽へ抗っている少年少女たちへ、ペンという最強の武器で、彼らの味方になりたいです。けれど、インドへ行くことは簡単ではないので、書き損じハガキや募金。そういった小さな今の私にできる精一杯の行動、思いをずっと大切にしていきたいです。そしてもう一つ。学べることの幸せに感謝して、将来得た知識や思考力を誰かのために使いたいです。例えば、ペンではなく剣をもたされる少年のために。例えば、世界の理不尽に抗う少女のために。これが私が勉強を頑張る理由です。

《奨励賞》（令和六年度全国中学生人権作文コンテスト明石・三木地区予選奨励賞）

言葉と人種差別

三木中学校　一年　福本　真人

皆さんは人種差別について、考えたことはありますか。人種差別とは生まれた国や肌の色の違いなどで差別することをいいます。人種差別は世界全体の人権問題で、二〇二〇年五月には黒人のジョージ・フロイドさんが白人の警官により命を奪われるという事件がアメリカで起き、世界中で大きく報道されました。世界全体の問題ともなると簡単に解決できるものではありません。しかし、できるだけ多くの人に人種差別のことを知ってもらうことが人種差別問題を解決することに近づくと思います。

僕がなぜ、この問題をテーマにしようと思ったかというと、それは学校での出来事がきっかけです。僕が小学生だった頃、僕のクラスに外国からの転校生が来ました。その子は日本語が分からず、通訳の先生と一緒に授業を受けたり日本語の勉強をしたりして学校生活を送っていました。ある日、学校の誰かがその子に、ひどい言葉を教えている光景を目にしました。その子は日本語が分からないので教えてもらったとおりに

覚えようとしていました。それを見ていた周りの友だちは注意せずに笑っていました。僕はいやな気分になりました。

言葉はふしぎなものだと思います。優しい言葉や正しい言葉は人の心を温かくしてくれます。逆にひどい言葉を使うと、使っていた本人も周りの人も、悲しい気持ちになり、心は冷たくなってしまいます。

また、学校に入り、英語の授業がある中で感じたことがあります。それは、母国語ではない言葉を話すのはとても難しいということです。なぜなら、母国語ではない言葉を話すのには、人一倍勉強し、人一倍努力しなくてはならないからです。僕はＡＬＴの先生と話をすることが楽しいです。母国語は違うのに伝えたいことが伝わった時は、これ以上ないほどうれしいです。今思えば、どうしてこんなに楽しいことに気が付かなかったのだろうと思います。実際に外国人の方と一緒に話すことで、その楽しさに気付くことができました。また、外国から来た転校生との出会いにより、僕は一つ一つの国に特徴があり、いろいろな文化や性質があることを学びました。

しかし、この世の中には、人種差別をしている人、されている人がまだまだいると思います。差別している人には人それぞれ違って当たり前なのだから、自分がされてどう思うか考えてほしいと思います。されてる人には、人種差別される理由なんかないんだ、

そのままの自分でいいんだということを分かってもらいたいです。

人種差別をなくすには、人種差別について理解する、その人の個性、特徴を知ることが大切だと思います。この二つをうまく尊重していけば自然と人種差別はなくなっていくと思います。

僕はそれぞれの人、それぞれの国の個性、一つ一つが尊重される世界になってほしいと思います。人種差別はいけないことなんだと一人でも多くの人に知ってもらいたいと思います。僕は中学校で積極的に英語や外国の文化を学び、国籍や人種を超えて、これからもたくさんの人とコミュニケーションを取っていきたいと思います。世の中の人が相手を思いやり、毎日使う言葉、人の心を動かす言葉をたくさん使うことが、みんな幸せになり、世の中から差別をなくす一歩になるのではないかと思います。

【ＰＴＡ・一般の部】

《優秀賞》

子どもと親の向き合い方

別所中学校　ＰＴＡ　宮﨑　綾美

我が子にある日突然、

「もう私、学校には行きたくない。」

と言われたらあなたならどうしますか。子どもがもう一度笑顔を取り戻し学校生活に復帰できることを願い、親としてどのように関わればよいか必死に模索するのではないでしょうか。子どもが精神的に辛い場面に直面した時、親は子どもの思いを全て受け止め、常に味方であり続ける姿勢が子どもの心の支えになると私は考えます。

私の娘は、小学校六年生の時に不登校になりました。娘は小さい頃から明るく活発な性格で、学校のクラスの中でも比較的目立つ存在でした。下校後は毎日のように何人かの友だちが家に遊びに来てくれて、声を上げて笑いながら庭を走り回っていました。その

光景はとても微笑ましく、娘が友だちに恵まれ、そして充実した日々を過ごせていることに私は安心感を得ていました。

娘が六年生になった頃から、今まで家に遊びに来ていた友だちを見かける機会が少なくなり、家に一人で過ごすことが多くなりました。最近は学校でのできことも私に話をしなくなったなと不審に思い、

「そういえば、最近学校どう？〇〇ちゃんたち最近家に遊びにこないけど何かあったの？」

と、娘に聞いてみました。

「別に何でもないよ。ただ、最近遊ばなくなっただけ」

と、素気なく娘は返答しました。私もその時、女の子同士は気の合う友だちグループを作って行動するし、グループも流動的に変わる場合もある。高学年の女の子にはよくあることかなと、その程度に考えていました。その後も普段は明るく過ごしていましたが、何気ない時の表情が暗く、何か影を落としたようにも見えました。流石に娘の様子がおかしいと思い、娘と二人きりになった際に、

「やっぱり何かあったんじゃないの？様子が変だし何でもいいから今自分が思っていることを話してくれていいんだよ」

と優しく声をかけ、共感的な姿勢で尋ねてみました。すると娘は急に力が抜けたように床に座り込み、顔を俯けてボロボロ涙を溢しながら話し始めました。

「ママ、私もう学校には行きたくない。友だちからも避けられていて、グループの輪にも入れない。学校で一人で過ごすのがしんどい」

その言葉は衝撃的でした。私は娘が毎日楽しく学校生活を送っていると思い込んでいました。娘が出していた些細なSOSサインに気付けなかったことが悲しく、親として情けない思いでした。一人の時間が娘にとってどんなに寂しく孤独だったのか、その思いを一人で抱え込むことがどんなに苦痛だったのか。娘の気持ちを想像するだけで、胸が張り裂けそうになりました。そのことを機に娘は不登校になりました。学校を休むことで娘は精神的に楽になると私は考えましたが、家で過ごす時間が増えたことで人との関わりの機会が減少し、娘は明るさを取り戻すどころか孤独を深める結果となりました。私は娘の学校生活復帰への思いに焦りを感じていましたが、二人で遊びに出かけたり家で勉強を一緒にしたりと、娘がやりたいと思えることをできるように過ごしました。娘の表情にも笑顔が戻りつつありましたが、根本的な解決には至らず、不登校になった自分自身に罪悪感を抱き続けていました。そんな時、娘が自身で調べ、不登校の子どもと親の

居場所として開放しているフリースクールの存在を知り、行ってみたいと私に話してくれました。最初は人の輪の中にまた入れるのか不安に感じているようでしたが、物作りや料理、ワークショップの開催等を通して人とのコミュニケーションにも自信を取り戻すことができました。

今、娘は転校し、友だちと何気ない会話をして笑い合ったり、勉強や部活に励んだりと、自分自身が思い描いていた日常生活を送ることができています。それは不登校期間に親子間で自分自身を見つめ直し、心の充電期間を設けたことで、自分から行動したいと思えるようになれたからだと私は考えます。子どもにとって大切なのは、人との関わりです。一人では孤独の暗闇を抜け出すことは非常に苦しく困難なことであり、周囲の人間が手を差し伸べることも必要です。また、フリースクール等の多様化した個々の子どもに応じた居場所の確保も重要視する必要があると感じました。

子どもたちが毎日笑顔で自分らしく生きるためには、一番近くで見守る親や周囲の人間が子どもの視線に合わせて物事を考え、行動する必要があります。そして、子どもと向き合い続けることが、その子自身の自分らしさを導く糸口となるのではないでしょうか。これからも私は、我が子の一番の味方であり続けたいです。

《優良賞》

子どもの人権

自由が丘東小学校　ＰＴＡ　渡邊　令奈

近年、大人による子どもへの人権侵害が深刻な問題になってきていると感じています。親による虐待行為、学校やＳＮＳでのいじめなど、様々な形で子どもを取り巻く環境が脅かされています。

では、「子どもの人権侵害とは、一体何なのか」それを考えたときに、自分自身の子育てを振り返りました。そうすると、私自身も子どもを「否定している」ことに気付いたのです。例えば、子どもが食事中にお味噌汁をこぼしたときに

「何してるの？」

「気をつけていないからでしょう」

と叱ってしまいました。しかし、このお味噌汁をこぼしたのが大人であれば、このような言い方はしなかったはずです。

「大丈夫ですか？」

「服は汚れていませんか？」
などと言いながら相手を気遣ったり、心配したりするのではないでしょうか。また、子どもが学校に宿題や筆記用具を忘れたとき、
「学校出るときに確認しないからでしょう」
「何回目なの？」
と、くどくど言ってしまいました。しかし、その相手が大人であれば、
「大丈夫ですよ」
「次で構いませんよ」
と、笑顔を見せながら話すのではないでしょうか。

親子の間では、このような理不尽なできごとが毎日繰り返されています。そして、私たち親や大人はそれを理不尽だと思わないのです。何故こういうことになるのかと考えれば、「親」「大人」という権威的な立場に甘えているからです。子どもは弱い存在であり、親や大人は圧倒的な権力者です。親には「子どものため。しつけのため」という強い思い込みがあるから平気なのです。しかし、それはただの言い訳にすぎません。本当は、相手が自分よりも弱いからです。弱い相手を一方的に攻撃する、いじめなのです。これは、親や大人による子どもへの人権侵害と言っても過言ではありません。そのような経験をし

た子どもは、弟や妹、クラスの弱い子をいじめるかもしれません。親が「強いものは、強く言っていい」と教えているのです。

学校や職場など、社会のあらゆるところでいじめやハラスメント、人権侵害が起こっています。ところが、昔は「人間関係があるところでは、あって当たり前のこと」くらいの認識しかありませんでした。子どもにひどい言葉をぶつける親たち、理不尽な振る舞いをし続ける大人たち、誰一人として自分が子どもをいじめていると思っていません。それでは駄目なのです。子どもの尊い、一回きりの人生を考えるのであれば、「親であっても、いじめは許されない」という認識に至るべきなのです。私は、自分自身の子育てを振り返って、とても反省しました。そして、人は皆、平等であり、それぞれに人権があることを再認識しました。けれど、環境や年齢、身体能力などは同じではありません。だからこそ、人としての尊敬の念や、思いやり、いたわりの心をもって接していくのです。

「人権」について考えることは、とても難しいように感じますが、身近な人や身近な場所で考えてみてはどうでしょうか。同じ人間同士が肩を並べて歩んでいくための人と人との間の権利、私たちが無意識のうちにつくり出している優劣の壁を取り払うこと、自分の価値観を他者に押し付けないこと、みんな同じひとりの人間なのだと、人の心に寄り添い、理解し、認め合う努力こそが、「子どもの人権」を守り、「子どもの権利保障」に

つながる大きな力になると思います。これからの未来を担う子どもたちの人権について、改めて考える機会をもち、子どもとともに成長していきたいと思います。

《佳　作》

言葉に対する責任について

吉川小学校　ＰＴＡ　森本　まりこ

今の時代に欠かせないほど、日常にはインターネットが浸透しています。私も実際に毎日のように利用してお世話になってます。

手軽に見られたり検索もしやすくて便利ですが、使いかたによっては犯罪に巻き込まれるなど怖い一面もあります。

人権のことを考えたとき、耳にすることが増えた、ＳＮＳでの誹謗中傷が思いつきました。

最近でも、度重なる誹謗中傷に傷つき、自ら命を絶ってしまった芸能人のニュースを目にしました。匿名をいいことに、心無い言葉で攻撃する。毎日のように誰だか分からない不特定多数の相手から中傷されたら誰だって辛くて嫌になると思います。

匿名は個人のプライバシーを守るためのものであって、人を傷つけるためのものでは

決してありません。

数年前より、世界中に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症に関する内容もあります。患者さんや命がけで治療に携わっている医療関係者へ向けた誹謗中傷です。

中には自分本位な行動ゆえに患者になってしまった人もいます。ニュースを見ていて、私も「なぜ自粛していられないのか？」と思うこともありました。けれど、だからといって相手に攻撃しようと思いません。自分は感染しないように感染対策を徹底して気をつけようと思うだけです。

誹謗中傷する人は、どのような気持ちで言ってくるのでしょうか。もし自分が感染して、誹謗中傷を言われると、あの時自分がしてしまっていたことを後悔することになるはずです。

自分がなったらどうしようという不安からの行動なのかもしれません。けれど、その不安をぶつけるのは間違っていると思います。大変なのはみんな同じなのです。

令和五年五月八日からコロナウイルス感染症は、五類感染症に移行されました。インフルエンザと同じようになったので、コロナウイルスに感染しても、恐れることなく一人一人落ち着いた行動を取って、世界中から終息してほしいと願っています。

東日本大震災の時、「放射線がうつる」と浅はかで無責任な情報がネット上に広がり、福島であるというだけで拒否されたという話をたくさん拝見しました。差別や偏見は暴力と同じだと思います。

ネットは正しくない情報すら正当化され、被害にあう側に数えきれないほどの攻撃としてのしかかるのです。誰もが利用できるからこそ、そこには責任があると思います。無知の情報を載せる人も、その情報を真(ま)に受ける人も、そしてそれを広める人も、その言葉の責任を考えていないように感じます。

私たちは、何気ない言葉ひとつで人を死に追い詰めることができるという事実を忘れてはいけません。

ネットでも日常でも、誰もが、誹謗中傷といった攻撃のためではなく、守るためだったり、良いものを生み出すための「言葉」を使えることがとても理想だと思います。

そして、子どもも大人も人種も関係なく、人として、一人一人が自分の言葉の重さと責任を常に考え選ぶことが人権を守ることに繋がるのではないかと思います。

《佳 作》

つながる支援の輪

自由が丘中学校 ＰＴＡ 中田　瞳

私は以前、小学生を対象とした「Ｔシャツでエコバッグを作ろう！」というイベントに親子で参加しました。大学生が開催しており、着られなくなったＴシャツを各自が持参しました。

まず、海洋プラスチックの問題について教えていただきました。川から海に流れ込むプラスチックごみは量も多く、生物に悪い影響を与えてしまいます。そのゴミを海の生物が食べてしまったり、そのまま長い期間海に残ってしまいます。そういったゴミを増やさないようにするにはどうしたらいいかを参加した子どもと考え、分かりやすい図で説明してもらいました。私たちが身近にできることは、エコバッグを使い、レジ袋を使わないようにしてゴミを減らすことです。また、まだ着られるＴシャツをエコバッグにするということもいい考えだと思いました。

最初は緊張していた参加者も和やかな雰囲気に包まれ、エコバッグ作りが始まりました。始めに、Tシャツの裾や袖を切り、次に裾の部分を縦に同じ間隔で切ります。深さを合わせて最後に裾を端からすべて結びます。

学生が一人一人そばに来て、やさしく丁寧に説明してくれました。難しい作業では手伝ってもらい、手順どおり作成しました。その後、それぞれのエコバッグができあがりました。バッグのサイズは、子どものTシャツなのでB5サイズぐらいになりました。Tシャツを再利用したエコバッグを作るのに針や糸は使わずにできるというのには驚きました。一人ずつ個性がでていて、バッグとして生まれ変わったTシャツを参加者も気に入った様子でした。

この学生たちは、イベントの他にも学習支援のボランティア活動をしていると聞きました。小学生や中学生に向けて平等な学習機会を与えたいという気持ちで活動しているようです。

最初は、ボランティアや海外の貧困問題について関心がある学生が集まったそうです。それから身近でできることや問題を考え、学習支援を考えたようです。取り組むべき課題に対してすぐに行動に移すことができるのには感心しました。

学生たちは、子どもの宿題の補助や勉強を教えることや交流を大事にしているようです。そして、交流を通じて居場所づくりについても考え始めたようです。

いろんな背景を抱えている子どもたちに安心できる環境が作られているのは、学ぶだけでなく、温かさを感じることのできる場になっていると思います。

この学習支援の様子の写真を見せてもらいました。絨毯の上に低くて長いテーブルが置いてあり、落ち着いた様子で参加者はテーブルを囲んでいました。持ち寄った宿題などに熱心に取り組み、学生が子どものそばで優しく接して教えています。写真からは、穏やかでぬくもりがある空間のように見えました。同じ時間を過ごすことで交流を深め、こういった環境を仲間たちと作ってきたのだと感じました。

学習支援を行っている場所は、子ども食堂だそうです。この子ども食堂では、学生たちが子どもと夕食を一緒に食べたり、学習支援の時間まで遊んだりしているようです。勉強だけではなく、楽しく遊べる場にもなっていて、また通いたくなるような子ども食堂だと思います。

また、学生が企業に支援をしてもらえるよう努力したそうです。企業からの支援もあって世界地図パズルやことわざかるたなど寄付をしてもらい、それを使って遊んだりし

ていると聞きました。いろいろな人たちが関心を持ち、支援に取り組んで支え合い、つながっていることが分かりました。

私は子ども食堂については詳しく知りませんでした。しかし、それぞれの子ども食堂によって、方向性や特徴があるようです。地域活性や学習支援、体験学習、世代交流など、いろいろなことができる場にもなっていると分かりました。

この学生たちが活動している子ども食堂では、赤ちゃんからお年寄りまでいろいろな世代の人が集まり、地域の交流の場にもなっているようです。障がいのある方もボランティアとして携わっておられ、穏やかで共に楽しみ、一人一人を大切にしてくれるような心地よい場であるように思います。

真っすぐな思いで共に仲間たちとボランティアをしている学生たちにはたくさん教えられ、応援したい気持ちになりました。支援の輪もどんどん広がっていく未来であってほしいと思います。卒業までの学生たちの時間は限られていますが、継続的に学習支援が続くように期待したいと思います。

《奨励賞》

理解と共感のある優しい社会へ

別所小学校　ＰＴＡ　木下　紗也加

まず初めに、人権はすべての人が生まれながらにして持つ権利であり、差別はその人の人権を侵害する行為です。

私が普段生活していて感じることは、障がいのある人は社会的な差別や偏見に直面することが多いということです。

私は知的障がいのある叔父が二人います。一人目の叔父は昔施設にいました。今は周りの人たちの支えもあり、同じ障がいのある何人かで助け合いながら一軒家で共同生活を送っています。春休みや夏休みの長い休みがある度に、叔父は家に帰ってきてよく一緒に過ごしていました。私はまだ幼かったけれど、幼いなりにも障がいのことはある程度理解していました。よく施設の夏祭りにも行きました。軽度の障がいの方や重度の障がいの方々、いろんな人たちがいました。笑顔でずっと話しかけてくれる人や、くじ引きで当

たった景品をくれる人もいました。本当にみんな優しくて私は毎年そのお祭りに行くのが楽しみで仕方ありませんでした。

二人目の叔父は知的障がいの中でも最重度で、病院でしか会うことができませんでした。話すことも意思疎通も全くできなかったけれど、月に一度必ず家族で叔父の好きな果物とジュースを持って会いに行っていました。叔父はいつも飲み物を一気飲みし、食べ物は一口でパクリと食べていました。差し入れを持って行っても、ほんの一～二分もあればすべて食べ終えていました。その度に母が

「そんなに焦らんでも誰も取らへんで～」

と言ってみんなで笑ったのを覚えています。そんなせっかちな叔父は残念ながら三十三歳という若さでこの世を去りました。お葬式が終わった後に、病院から一歩も出られずに毎日たくさんの薬を飲んでいた叔父に、母が「弟は幸せやったんかなぁ」と涙を流しながら言ったことを今でも鮮明に覚えています。当時十三歳だった私の心にとても重く痛く響く言葉でした。命の尊さや幸せの在り方について、考えさせられる出来事となりました。

私は物心がついた頃から、障がいのある方々と多く触れ合って生活してきたので、それ

がごく自然で当たり前で、特に何も思わず暮らしてきました。

そんな私が、小学生のある日にとても悲しい出来事がありました。学校の帰り道、目の前にダウン症の人がいました。叔父宅の夏祭りでいつも私に話しかけてくれたダウン症の女の子のことを思い出しました。その時、私の周りにいた子が、

「あの人変じゃない？なんか怖くない？」

と言って走り出しました。私にはその子が何を言っているのかまったく理解できませんでした。なぜそんなことを言うのかと、腹立たしく、とても悲しい気持ちになりました。しかし、今思えばその当時はまだＳＮＳも普及しておらず、障がいについての知識も低く、私みたいな環境で育っていない子からしたら、悪気があって言った言葉じゃなかったのかもしれないなぁとも思います。

しかし、障がいのある人を目の前にすると、未だに好奇な目で見る人は少なくありません。今はいろいろな障がいのある人や、他人には気付けない障がいのある人もいます。

だからこそ、もっと障がいのある方々と触れ合う機会を設けたり、大人から子どもたちにこんな病気や障がいがあるんだよと教えていけたら良いなと思います。

障がいについて、皆がもっと理解を深め、誰もが受け入れ、支えあえる優しい世の中に

なってほしいと思います。

差別をなくす為には、私たち一人一人の意識と行動が重要です。

まずは自分から変えていくことで明るい未来を築くための一歩を踏み出していこうと思います。

令和六年度
全国中学生人権作文コンテスト入賞作品

（明石・三木地区予選　優秀賞）

優しい社会へ

三木中学校　二年　久米　杏里紗

「大丈夫ですか」

その言葉はとても勇気のいる言葉です。

ある日、私は友だちと公園で遊ぼうと二人で歩いていました。公園に着くと、公園のトイレの前におばあちゃんがいました。おばあちゃんに軽くあいさつをしてその場を通り過ぎましたが、何となく気になったので私はおばあちゃんの方を振り返りました。すると、さっきのおばあちゃんがトイレの前にある段差を上ることができず、困っているようでした。私はおばあちゃんに声をかけようか迷いました。急に声をかけて驚いたりしないかな。声をかけるにしてもなんて声をかけようか、と心の中で考えていました。そして友だちに

「あのおばあちゃん、段差上がられへんのかな。手すりがあるから大丈夫かな」

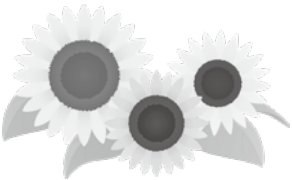
と話しました。しばらく様子を見ていましたが、やっぱりおばあちゃんは手すりがあって

も段差を上ることが難しそうでした。そこで勇気をもって、
「大丈夫ですか。何かお手伝いできることありますか」
と友だちと二人でそのおばあちゃんに声をかけました。おばあちゃんは急に声をかけられて少し驚いたようでしたが、
「じゃあ、手をかしてくれる？」
と言いました。私はおばあちゃんが持っていた鞄を手に持ち、おばあちゃんの手を友だちと二人で握って一緒に段差を上りました。おばあちゃんは笑顔で、
「ありがとう。助かったわ」
と言い、トイレに入られました。その後、トイレから出られてからもさっきと同じようにおばあちゃんの手を握り、無事にトイレをすることができました。おばあちゃんは私と友だちに、
「中学生。何の部活に入っているの？」
などいろいろなお話をして帰っていかれました。おばあちゃんが帰られたあとに友だちと勇気を出して声をかけてよかったと話しました。
　知らない人に声をかけるのはとても勇気がいることです。気づいていても声をかけるこ

とができずに見て見ぬふりをしてしまうことがほとんどです。でもほんの少し勇気を出すことで「優しい社会」をつくることができると思います。そして「優しい社会」をつくるには私はまずあいさつを交わすことが大切だと思います。あいさつをすることで今まで気づけなかったことにも少しは気づくことができるのではないかと思います。また、気づくだけではなく、行動に移すことが大切だと思います。「優しい社会」には、お互いが思いやりを持つことと、お互いに感謝の気持ちを持つことが大切だと思います。

私はこれから大きな声で学校や地域の人たちに笑顔であいさつをしたいと思います。あいさつをすることで顔を知ってもらって地域の人たちとの関わりができると思います。

そして、顔を知ってもらうと、お互いに気軽に声をかけやすくなるのではないでしょうか。そういった地域との関わりがきっと「優しい社会」をつくることに繋がると思います。



（明石・三木地区予選　優秀賞）

思いやりの輪

三木東中学校　二年　西岡　美湖

みなさんは普段生活をしている中で、「不自由だなぁ」「なんかやりづらいなぁ」と感じたことはありませんか。今まで何不自由なく当たり前にできていたことが、怪我や病気が原因で、急にできなくなったことはありませんか。

私は小学三年生の冬に、ストーブの上に置いてあったやかんに服を引っかけてしまい、沸騰したお湯が足の上にこぼれ、右足に大やけどを負ってしまったことがあります。その時、今まで当たり前のように登下校していた道も歩いて通うことが難しくなり、小学校での階段の上り下りも辛くてできなくなってしまいました。

今まで当たり前にできていたことが、急にできなくなってしまった辛さや大変さ、今でも記憶に残っています。でも、私がそんな状態になった時、お父さんとお母さんが毎日学校まで車で送迎してくれたり、友だちが荷物を持ってくれたりして、私自身、周りの優

しさにとても助けられました。

また、四年生の時には、授業で車いす・アイマスク体験、点字や白杖を調べたりする機会がありました。なかでも、アイマスク体験は、目隠しをしながら友だちに支えられて、階段を上り下りしました。廊下にある障害物を手で確認しながら、慎重に歩いたりもしました。周りがまったく見えないのが不安で、怖いなと感じましたが、友だちが声をかけながら優しく支えてくれたおかげで少し安心できました。

そしてもう一つ。私は以前、お母さんが話していたことを思い出しました。それはひいおばあちゃんが入院した時のことです。ひいおばあちゃんは九州に住んでいます。子ども二人を連れての見舞い、九州という遠方なので泊りがけの見舞いになるため大荷物だったそうです。それに加え、生後七か月の私はベビーカーに乗っていて、二歳年上の兄は活発でいつどこにいくか分からないので手をつないでおく必要もありました。博多の駅はスロープやエレベーターもあり、移動に苦労することはなかったそうですが、乗り換えてたどり着いた田舎の駅には、エレベーターがなく、改札口までは階段を上り下りしなければいけなかったそうです。お母さんが階段を見上げて「さあ、がんばらないと」と思った時でした。若い男性が

「ベビーカー持って上がりましょうか？」
と声をかけてくれたそうです。そして、私が乗ったベビーカーを階段の上まで持っていってくれ、そのうえ、階段を降りる時も手伝ってくれたそうです。お母さんはこの男性の思いやりのある行動で、とても救われ、長旅の疲れも吹っ飛んだそうです。私は、この話を聞いて、とても優しく温かい気持ちになりました。

私も中学生になり、最近では友だちと出かけることが多くなりました。街中には困っている人や、少し手伝ってくれると助かるなと思っている人がいると思います。常に周りに気を配っているということは難しいけれど、もし
「あの人困っているかも」
「少し手伝ってあげたら嬉しいんじゃないか」
と気が付くことがあれば、進んで声をかけてあげたいと思います。本当の気持ちは本人しか分からないこともあるので、もしかしたら、手助けが必要ではないことがあるかもしれません。断られることもあるかもしれません。でも、言い出せずに困っている人もいるかもしれないし、私自身、優しい声かけをしてもらって嬉しかった経験があります。だから、私は思いやりの声かけを進んでしていきたいと思います。そして「思いやりの輪」を広

げて、自分の周りから優しい社会をつくっていきたいと思います。

（明石・三木地区予選　奨励賞）

自分とはちがうから

自由が丘中学校　一年　新﨑　奏心

昔から「人を見た目で判断してはいけません」と言われてきました。誰しもが「いけないこと」だと思っていて、気をつけていることだと思います。ですが、私は人を見た目で判断しないということはすごく難しいことだと思います。

人が初対面の人と出会った時に、最初に見る部分はどこかと考えたことはありますか？私は「見た目」だと思います。「声」「表情」「性格」など、人にはさまざまな特徴があります。ですが、最初はやはり「見た目」を気にする人が多いのではないでしょうか。

かわいいから、かっこいいから、という理由ですべてがいいわけではありません。ですが、私自身も、かっこいい人、かわいい人はいいように目に映ってしまいます。しかし、その行為は「人を見た目で判断する」ということに繋がるのだと私は思います。

実際に、そのことについて深く考えたのは私が小学三年生のとき、香川県にある「大島」という島に行ったときです。その島は「ハンセン病」と呼ばれる病気を患った人たちが隔離されていた島であったと知りました。

ハンセン病という病気は「らい菌」と呼ばれる菌に感染して起こる病気です。感染し発病すると、手足などの神経が麻痺し、痛い、熱い、冷たい、といった感覚がなくなります。そうなると、怪我をしたことに気づかず、悪化することで、手足を切断することもあり、見た目が大きく変わってしまう病気でした。

世間では「気持ち悪い」や「自分たちとは違う」などといった差別を患者さんたちはひどく受けました。そのせいで島から身を投げて亡くなった人もいたそうです。

らい菌の感染力は弱いにも関わらず、大きな誤解を受け、長い間差別を受けていました。今でも後遺症が残っている患者さんたちが数多くいます。

私は当時、さまざまな資料を見ましたが、「気持ち悪い」といった感情はありませんでした。しかし「怖い」と思ってしまいました。自分が知らない世界を見るという感覚で怖いと感じてしまいました。

今思えば、それも「見た目の差別」だったのではないでしょうか。口には出さなかったけ

ど、自分とは違うからといった感情で、心の中では差別をしてしまったのだと思います。

もし、人に少しでも「助けよう」という気持ちがあれば、「気持ち悪い」という差別がなければ、助かった「命」も数多くあったのではないでしょうか。この島に行って生きる意味を考えました。そして新しい世界を見て考えを改めることができました。

「人を見た目で判断してはいけない」ということは本当に大切なことで、大事にしていかないといけません。でもすごく難しいことだとも思います。見た目というのは人の印象の一つでとても大切です。一方で見た目のせいで、あらゆる可能性を失うというマイナスな部分もあります。だから私は見た目にとらわれずに、生きていきたいです。そして、ハンセン病のような見た目の差別を受けて、亡くなる人や、心に深い傷を負う人を少しでも減らしていきたいと思います。

（明石・三木地区予選　奨励賞）

盲導犬の大切さ

吉川中学校　一年　國嶋　心琴

去年の秋、我が家の柴犬が三匹の赤ちゃんを産みました。かわいくて手放せず親に頼んで一匹を残し、一緒に飼うことにしました。私は、暇さえあれば、犬のそばで過ごしています。

そんな犬が大好きな私に「光をくれた盲導犬」という本を母が勧めてくれました。パピーウォーカー、訓練士、ユーザーボランティア、誕生から引退までの一生に関わる多くの人の思いが詰まった本です。「盲導犬」と聞くとおとなしく真面目な犬というイメージをもっていましたが、実際は向いているか向いていないかの運だけで、特別に優れているというわけではありません。人間と同じで個性と適性があるだけのことです。仕事中はハーネスをつけていますが、外しているときは、普通の犬と同じで、遊んだり甘えたりして過ごすことを知りました。それなのに「盲導犬はかわいそうだ」と、思われがちです。確かに

ハードな訓練や仕事中に事故にあって急なトラブルには対応できないかもしれません。これは、私たちが

「あの人は盲導犬がいるから大丈夫」

「むやみに声かけをしたらダメ」

などと、勝手に思い込んで適切なサポートを考えなかったからだと思います。

また、点字ブロックに駐輪したり荷物を置いたりする人、歩きスマホで目の前の人にすら気づかない人、目の見えない人にとって外の世界は想像以上に危険だらけなのです。もし、町で盲導犬を見かけたら必要に応じて声をかけられる人間になりたいです。きっと緊張するし、断られたら気まずいなと思ってちゅうちょしてしまうかもしれません。それでも、声をかけることで、防げることがあるかもしれません。私は、そっと見守って

「何かお手伝いすることありますか?」

と声をかけてみようと思います。

この本を読んで、視覚障がいのある人たちができるだけ自立できる環境を作るのも私たちができることの一つだと気づきました。今、社会の中ではまだまだ入店拒否や乗車拒否などが多いのが現実です。これは、周りの人の手助けでクリアできることもある

と知りました。どんな小さな事でも行動に移していけば一つ一つの善意が人から人へ移り、住みやすい町になると思います。

盲導犬はもともと人間好きな犬が選ばれるし、体調管理もされているし、何よりユーザーやボランティアの人たちに愛情をたっぷりもらっているので、かわいそうな扱いを受けているのではないです。むしろ、人間のいやしの存在となり、チャレンジする気持ちや勇気を与えてくれます。だから、もし、「盲導犬はかわいそうだ」と、思っている人がいるならば、「違うよ」と、言いたいです。盲導犬は目の不自由な人の目なのです。視覚障がい者に優しい社会にしていき、「もし、自分の目が見えなくなったら」と想像し、相手の立場に立って考えることが大切だと思います。

私は、入学式の日に山中先生が話されていたように、自分のことのように他人も大切にしたいです。そして、動物の命も人間と同じくらい大切なものだから共に生きるパートナーとして支えあわなければなりません。私は、将来、人と動物をつなぐ橋渡しができる職に就きたいと思っています。もっと私たち一人一人が盲導犬に興味を持ち、理解することで誰もが暮らしやすい温かい社会になることを願っています。

（明石・三木地区予選　奨励賞）

ヘルプマーク

三木中学校　二年　マダ　ラリッサ

みなさんは「ヘルプマーク」のことを知っていますか。

「ヘルプマーク」とは、義足や人工関節を使用している方、内部障がいや難病の方、または妊娠初期の方など、外見からは分からなくても、援助や配慮を必要としている方々が、周囲の方に援助や配慮を必要としていることを知らせることで、援助や配慮を得やすくなるように作成されたマークです。

私は実際に、電車でヘルプマークをつけている人を見かけたことがあります。しかし、周りの人たちは声をかけたり助けたりしないで少し距離をとっていました。そして

「うわ。あの人障がい者だ」

とひどいことを言っている人もいました。

私は、ヘルプマークをつけている人が電車を降りようとしているときに声をかけようかすごく迷いました。けれど結局勇気が出なくて声をかけられませんでした。しかし乗っていた女性がヘルプマークをつけた人に、

「大丈夫ですか。お手伝いしましょうか」

と声をかけました。するとヘルプマークをつけた人は、

「ありがとうございます。とても助かりました」

ととても笑顔で言いました。

私は声をかけた女性がとてもとてもかっこよく見えました。そして勇気が出なくて、声をかけられなかったことをとても後悔しました。

私はヘルプマークをつけているからと、避けたり悪口を言うのは間違っていると思います。そして声をかけようか迷ったときは勇気を出して声をかけるべきだと思います。

私は以前、

「ヘルプマークをつけていることで周りの人たちから障がい者として見られるのが怖い。悪口を言われたり、避けられたり、健康な人とは違うと思われるのがいや」

と話している人を見かけました。やはり周りの人たちから障がい者と思われて、避けら

れたりするのがとても怖くて、嫌だったんだなと思います。

私はそのような思いをする障がい者がいなくなってほしいです。健康な人が当たり前にできることが少しできなかったり、できるまでに時間がかかったりするかもしれないけど、だからといって、避けたりするのは絶対におかしいと思います。

私は、障がいのある人たちも嫌な思いをしないで生活できるような社会になってほしいです。

そのために、まずは自分ができることをどんどんやっていきたいです。電車やバスで立っているのがしんどそうだったら、優しく声をかけて席をゆずったり荷物を持ったりしたいです。他にも歩くのがしんどそうだったら荷物を持ったり一緒に近くを歩いたりしたいです。

勇気を出して声をかけるのは難しいことだと思います。けれど助けられた人も助けた人も嬉しい気持ちになります。ですのでみんなが思いやりの気持ちをもって接してほしいです。そしてみんな嬉しい気持ちになる社会になってほしいです。

（明石・三木地区予選　奨励賞）

言葉の責任

別所中学校　二年　大西　千弥

今の時代、生活に欠かせないものの一つになった、インターネット。興味や関心があることを調べられたり、さまざまな国や地域の言語、年齢に関わらずにコミュニケーションをとって、新しい友だちを作れたりなどの良い面がたくさんあります。しかし、僕は新型コロナウイルスによって、一変した世界やインターネットの危険性を調べたことで、とても怖い面があることを知ることができました。

最近、聞くことが多くなっていた、「誹謗中傷」という言葉、その人の存在そのものを否定する言葉によって自殺してしまった芸能人のニュースを見ました。僕は、そのとき、友だちとけんかをしたときのことを思い出しました。どちらも、何も考えずに言ってしまった一言がお互いを傷つけてしまったのです。そして、僕はインターネットでの誹謗中傷と似ているものに感じました。誰かが言っているからと、何も考えずに多くの心ない言葉で毎

日のように攻撃をされるのは、誰もが耐えがたいことだと思います。

二〇一九年から世界中に猛威をふるった新型コロナウイルスに関する内容がありました。未知のウイルスに命がけで働いている医りょう従事者の方や患者さんへ向けた誹謗中傷です。新型コロナウイルスによって潰された日常へのストレスや不安感からの行動だったのかもしれません。しかし、その不安感は誰もがもっていて、大変なときはお互いの手をとりあって、優しさと思いやりの心をもっていくことが大切だと考えます。誰もが使えるからこそ、何かするときには、一度、立ち止まって、偏った考えをもたずに多くの視点から見て、どうなのか判断し、一人一人が責任をもつ必要があると思いました。

そして、インターネットを使うなかで、これから、気をつけないといけないと思ったことがあります。それはフェイクニュースの増加です。災害の学習で、フェイクニュースという言葉を知りました。二〇一一年に起きた、東日本大震災では、原発事故によってでた、放射線に関するうその情報が、ネット上に広がり、無責任な言葉によって、たくさんの人が傷つき、根深く残る、福島県産の果物や魚などへの風評被害が起きてしまいました。

二〇一六年には、熊本地震でSNS上にライオンが動物園から逃げて、街を歩いているという画像つきの情報が、拡散され、現地に混乱をまねきました。無知な偏見や差別は

ときには、暴力と同じくらい凶悪な武器になってしまうことを学びました。

誰もが自由にインターネットを使うことができるからこそ、一人一人が責任を持つことがとても重要だと思います。僕は感染症や災害での学習で、不安感やストレスなどが原因となってしまうと考えます。一つの言葉は、良い世の中にも、悪い世の中にも変えることがわかりました。小さな思いやりと優しさが人と人とを繋げ人権を守れると思いました。

（明石・三木地区予選　奨励賞）

優しさあふれる世界に

吉川中学校　二年　木村　那美

みなさんは、電車やバスで席に座れていない高齢者を見て席を譲ろうと思ったことはありますか。私はよく、ユーチューブで高齢者に席を譲るという動画を見ます。私は電車やバスにあまり乗らないので、実際に見たことがありません。でもいつか譲ってみたいと思っています。

私が高齢者に席を譲るとよいと思う理由は二つあります。一つ目は、電車やバスが揺れたとき、倒れてケガをすることを防ぐためです。高齢者が倒れてしまうとケガをするだけでなく、バスや電車が遅れてしまい、他に乗っている人も困ってしまうことがあると思うからです。

二つ目は、高齢者を敬う社会にしたいからです。高齢者はこれまでの日本を作ってきてくれた方々です。私たちが今楽しく暮らせているのは、その方々のおかげです。敬うと

いうことが当たり前の社会を維持すると、今よりもっとあたたかい世界になると思います。自分が高齢者になった時に安心して暮らせるといいなとも思います。

席を譲る理由を考えてみると、席を譲るという大切さを改めて知ることができました。

ある資料では、優先席に座っている人に、「高齢者に席を譲りますか」と聞いたところ、約九割の人が譲ると答え、約一割の人は譲らないと答えているそうです。「譲らない」と答えた人の理由としては、「体調不良・ケガをしていたから」、「優先席以外が空いていなかったから」、「自分が優先席を必要とする特性があったから」という意見があがっていました。

私は、なぜ譲らないのだろうかと改めて考え、家族にも、理由を聞いてみることにしました。すると家族は、「とても疲れていたから」、「話しかける勇気が出なかったから」、「以前に断られた経験があるから」、「高齢者と決めつけて声をかけるのは失礼にあたるかもしれないと思っているのではないか」、と言っていました。

この四つの理由の中で私が共感したものが二つあります。一つ目は、「断られてしまった経験がある」ということです。確かに、一度断られてしまうと、次も断られてしまうかもしれないと思い、譲るのをやめてしまうかもしれません。しかし、私は断られてしまっ

ても、譲ろうと声をかけてくれた人の優しい気持ちは相手にきっと届いていると思います。

二つ目は、「高齢者に声をかけるのは失礼にあたるかも」ということです。私は、席を譲るために声をかけたら、自分は高齢者の扱いをされていると思われ、その人を嫌な気持ちにさせてしまったという動画を見つけました。私も、この動画をきっかけに、

「譲ります」

と相手に言うことが少し怖くなりました。しかし、高齢者扱いをされるのが嫌だという人は全員ではありません。自分のことを気にかけてくれてうれしい人も必ずいます。だから、私は譲る選択をしたいと思いました。

みなさんの身近にいるおじいちゃんおばあちゃんに席を譲るのも一つの方法です。まずは自分にできることから始めるとよいと思います。私が高校生になると、バスに乗ることが増えるので、そのときに、もし席に座れない人がいたら、譲ってあげたいです。「高齢者に席を譲る」、「勇気を出して声をかける」その行動一つで救われる人がいると思います。そんな姿を見て、周りの人も譲ろうと思ってくれるかもしれません。みなさんの行動で、世界が優しさであふれるようになってほしいと願っています。

（明石・三木地区予選　奨励賞）

あたりまえのありがたさ

三木東中学校　三年　伊藤　萌理

八月十五日、終戦して今年で七十九年目になります。年に一回ほど終戦記念のニュースが流れます。そのニュースで私は「特攻隊」というワードを耳にしました。その「特攻隊」の話があまりにも衝撃的で戦争について考えさせられました。

特攻隊とは自分の乗る飛行機に爆弾を詰め敵艦に体当たりする攻撃で命を絶った方々です。特攻隊はほとんどが二十歳前後の人でできていて、最年少は十六歳だったそうです。中学三年生の私は十五歳になる年で十六歳と一歳しか差がありません。その年で特攻なんて国のために死にに行けと言われているようなものに行くことが信じられません。

特攻は人の命を軽視した、とんでもない作戦です。

ですが、特攻隊の方々の写真にはほこらしげな笑顔しか写っておらず、死への恐怖が全く感じられませんでした。自分は死ぬことが分かっているはずなのに、どうして笑顔でい

られるのかわけが分かりませんでした。
当時は国のために命をかけるのは当たり前のことで、志願兵になり戦場へ行くことはとても素晴らしいことでした。でも私は国民が国のために命をかけることが当時の当たり前だったとしても、やっぱり「死」というものは怖いものだったと思います。
国のため、国のためと自分が死にに行かなければいけない理由を無理に作っていたと思うと何とも言えない気持ちになりました。そして特攻隊員が出撃のとき、上空ではどんなことを思うのでしょうか。
本当はもっと生きたかったのではないでしょうか。
戦争で兵隊が死ぬときは、「大日本帝国万歳、天皇陛下万歳」と言うと教わるそうですが、実際に叫ぶのは「お母さん」だそうです。
十八歳の少年航空出身の遺書にはただ一言だけ「お母さん」と書いていました。
私は本当は誰だって戦争なんてしたくなかった、逃げられなかったんだと思いました。
こんなにたくさんの人の命をむだにし、苦しませた国の責任は重いです。戦争なんて誰も幸せにならないことを二度と繰り返してはいけません。
今の日本は戦争などない日常が当たり前です。しかし、その平和な日常は今までの多

くの犠牲があったから送れているものだと理解しなければいけません。

二度と戦争によって命を奪われる人が出ないように、大切な人を失う人が出ないように戦争のことを忘れないことが私たちの義務だと私は思います。

戦争を体験した世代は年々減っており、戦争の記憶は薄れていっています。私のような戦争のない時代に生まれた人には当時の人の苦しみや悲しみを感じることはできません。ですが感じることはできなくても知ることはできるはずです。

今も世界では戦争で命を落としている方がいます。昔の日本のように国に逆らえず、戦地に行ってしまった人も多くいるんだと思います。私たちは自分にとっても、他の誰かにとっても代わりなどいない世界でたった一人の人間です。

そのたった一人しかいない人間を守るために憲法があるはずなのに戦争なんて起こして何の意味があるのでしょうか。

また、たった一人の人間だからこそ、お互いへの思いやりが必要ではないのでしょうか。戦争によって奪われた命があったから私はこの平和な時代に生まれたんだと、この平和な日常がどれだけ幸せなことなのか私たちは考えなければいけないと強く思いました。

（明石・三木地区予選　奨励賞）

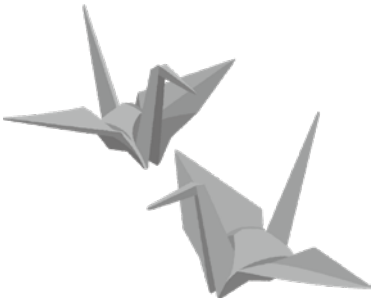
平和のために

自由が丘中学校　三年　山下　梨杏

私の曾祖父は二〇二四年に九十六歳を迎えました。昭和三年生まれで腰は少し曲がっていますが故郷の宮崎で今も元気に暮らしています。そんな曾祖父は、ちょうど私と同じ年の頃に太平洋戦争を経験し、十七歳頃に終戦を迎えた戦争体験者です。私は戦争をテーマとした人権作文を書こうと思い、戦争体験者である曾祖父に話を聞いてみました。戦時中は空襲警報が鳴るたびに大事なものを持って自宅の裏山に掘った防空壕に逃げ込んでいたそうです。また、アメリカの飛行機が上空を飛ぶたびに、爆撃の音がして怖い思いをしながら過ごしていたといいます。戦争では何十万人の兵隊が命を失いましたが、関係のない人まで次々に召集され、曾祖父は村の青年団として一日がかりで神社へ兵隊のための祈願をしに行きました。終戦を迎えた後も生活はアメリカの支配下であったため、食料も地区ごとの配給制で自由はなかったとも言っていました。その後は農

作業をするようになり、なんとか貧しいながらも食料がとれるようになり、生活できていたそうです。今では当たり前にある「人が人として生きる権利」などまったく度外視されていた時代を私の曾祖父は経験していました。戦争は私にとって遠い存在でしたが、身近な人が本当にこのような悲惨な状況を過ごしていたと知り戦争の恐ろしさを肌身で感じました。今でも世界ではウクライナ情勢の悪化やイラン、イラクで内戦が続いており、たくさんの命が犠牲となって何の関係もない人の幸せな生活が奪われています。しかし、こんな悲惨な時代が日本にもあったということを私たちが知る機会は学校の授業やテレビ、戦争関連の施設ぐらいしかなく、実際の体験談を聞くにも、体験者の高齢化でその機会も失われつつあります。インターネットで調べたところ、二〇二〇年の戦争体験世代の人口の割合は9・2％で一九七〇年代と比較して大きく少なくなってきており、その数は年々減ってきています。私の場合は曾祖父の実体験を聞くことができましたが、現代の子どもたちからすれば、祖父母も戦争体験世代ではなく、戦争の怖さを肌身で知っている世代と接しにくくなっています。平和への第一歩は「知ること」からです。今私たちが衣食住を簡単にでき安心して暮らせているのは当たり前のことではないということを戦争について何も知らない子どもたちに知ってもらわなければなりません。私たち

がこの悲惨な歴史を忘れないことは大切ですが覚えているだけでは不十分です。その歴史を語り継いでいくことと、見たり聞いたりして感じたことを後の世代に伝えていくことが何より大切だと思います。そうすることで他国で起きていることの重大さを理解し、平和についての考えも深まってくるのではないでしょうか。一口で平和と言っても人それぞれが感じるものは異なりますが、私は尊い命を犠牲にし争いごとをする戦争は最大の人権侵害だと思います。曾祖父が体験した悲惨な出来事を二度と繰り返さないために、また、過去の出来事として風化してしまわないように、未来へつないでいくことが私たちの役目ではないでしょうか。



（明石・三木地区予選　奨励賞）

インターネットと人権問題

吉川中学校　三年　競　尊

「皆さんは、インターネットについてどう思いますか」この質問をすると、ほとんどの人が「便利」や「楽しい」と答えると思います。スマートフォンが普及し、インフルエンサーという職業が生まれるほど、私たちの生活にとって、身近な存在となっています。そんなインターネットは楽しいだけではありません。ＳＮＳでの特定の個人を対象とした誹謗中傷、外国人や身体に障がいのある方に対しての差別的な書き込み、プライバシーの侵害、さらには、非公式サイトなどでのいじめなど、さまざまな問題が起こっていることに危機感を覚えました。

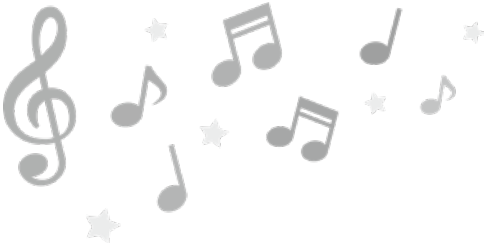
「いじめ」は、だめだと多くの人が理解しています。しかし、インターネット上ではどうでしょうか。先ほどの問題に対して、自分には関係ないなどとは思っていませんか。ユーチューバーに対するアンチコメントなどもこの問題の一部です。インターネットは匿名で発

信することができるため、現実の世界よりもこういった発言はしやすいとも言えます。しかし、誹謗中傷などの人権を無視した書き込みをされた人は、知らない人からの嫌がらせを受けるなど、生活に支障をきたしかねません。さらには、精神的に深く傷つき、追い詰められ、学校や職場に行けなくなったり、最悪の場合は自殺へと追い込まれてしまったりすることもあります。実際ここ数年、インターネットを利用した人権侵害をされ、自殺するという事件が後を絶ちません。「つい、やってしまった」では済まされないのです。ネット上では、「書き込みをされて心を痛めるのなら、ネットそのものをやめろ」という意見もあります。これは、間違っています。誹謗中傷を受けている方が悪いと言っているのと同じだからです。大半の人は、自分の興味のあること、好きなことを投稿しているだけです。投稿された内容に対して、「気に食わない」や「ムカつく」など、妬みの気持ちが湧くのかもしれません。しかし、そうであっても、人を傷つけてしまうことは、絶対にしてはいけないことです。

この問題を通して、僕は、インターネットでも、現実世界でも「される側がどう思うか」ということを意識して生活していくことが大切だと強く思います。私たちは、一人一人が違う個性や性格を持っています。生活をしていると、自分とは違う意見が出てくるの

は当たり前のことです。そんな時に「違うから」という理由で、相手に対して、攻撃的な言葉を使うのは絶対にやめるべきです。特にインターネットの匿名性を利用すべきではありません。書き込まれた言葉を、自分自身に向けて発してみてください。どれだけ辛く、悲しい気持ちになるか分かると思います。

人間は、言葉一つで相手を喜ばせることも、傷つけてしまうこともできます。もしインターネット上で、腹が立つことで何か書き込みをしようと思ったときは、このことを思い出してみてください。大人、子ども関係なく、一人一人が言葉の重さを理解して行動することで、大切な人権を守っていけると思います。



令和６年度

人権作文集 第５４集

差別をなくする輪をひろげよう市民運動

入賞作品集

発行日 令和７年２月

編集・発行 三木市・三木市教育委員会

この作品集の作品を広報誌に掲載したり、学校・園・所等の教育機関が教材として複製・印刷したりする場合は、三木市市民生活部人権推進課（☎0794-82−8388）まで連絡してください。